

平成22年12月1日

乙部小学校外国語（英語）活動公開研究会に参加して

若松小学校 教頭 佐々木 朗

1. 期日 平成22年11月30日（火）
2. 場所 乙部町立乙部小学校
3. 内容
 - (1) 公開授業 第5学年（HRT+ALT）
 - (2) 研究発表・研究協議
 - (3) ワークショップ

4. 内容のまとめ

(1) 授業について

①内容

若手の女性の松原先生とALTの女性の先生のTTによる5年生の授業であった。英語ノートの時間割のところの教材であった。

授業の流れとしては、クラスルームイングリッシュによる挨拶、教科について、ALTとHRTが一人ずつまわって、確認。そのあと、曜日を使ったカルタゲーム。キーワードゲーム。

メインは、6グループがそれぞれ、グループで決めた月～金の時間割を前に出ではっぴょうする。一人目「水曜日の1時間目は体育、2時間目は算数、3時間目は国語」（もちろん英語で）5人がそれぞれ、グループで決めた時間割を発表。一方黒板には、それぞれ4種類の時間割が掲示してある。聞いている児童は、発表グループの時間割がどれであるかを当てる。



その後は、ALTからのアメリカの小学校の説明。チャイムが一日に3回のみであるとか、教科によって、勉強時間の長さが変わるなど、プロジェクターを使いながら、優しい英語で説明、HRTは、訳さないが、時折内容を確認していく。

最後に子どもたちは振り返りカードを書き、自分ががんばったところ、友達ががんばったところを書いて、発表した。

②感想

乙部小学校は、小学校2年生の時から英語に慣れ親しんでいるということで、さすが、ALTに対してもとても慣れているし、Sunday、Mondayなどの基礎的な言葉については、すらすらと出てきている。

導入で一人一人の単語の定着を確認するというので、個に対応しているということで、最初のところから、かなり考えられて作られた指導案だなあと感じた。

次のカルタやキーワードゲームであるが、これもいわば小学校英語の定番である。今回は曜日でやったが、子どもたちは、真剣に取り組んでいた。



次は、各グループでの発表。研究授業ということもあり、全ての子どもたちに発表させたいという願いからとられた方法だと思う。ほとんどの子どもたちは、発表グループの時間割がわかり、手をあげていた。私は一人手をあげない子を見つけて、その子が他のグループの時にも手を挙げないか、そして、発表の時はどうかを見ていた。他のグループでも手を挙げることはなかったが、自分の発表の時は、大きい声とは言えないものの堂々と発表する姿をみた。一人一人がきちんとフォローされていることを感じた。

その一方、話している時間に対して、聞いている時間が相当に長く、内容を聞き当てるという課題はあったが、ちょっと聞いている方がつらかったところがあるのでないかとも思った。

最後の後半部分で、アメリカの小学校の様子についてALTがスライドを見せながら説明する場面があった。何枚かの学校の写真や、タイムテーブルなどが載っており、子どもたちにとっては、とても興味のあるような内容であり、聞き入っていた。その一方、英語での説明ということもあり、なかなか理解するのは難しいように見て感じた。HRTが適宜内容に関わるヒントを出して、子どもたちの理解を助けていた。

私はこの場面でのHRTの動きは、とても良かったと思う。HRTがALTの通訳になるのは悪いパターンである。なぜかという、子どもたちは、HRTの訳に規定して、ALTの英語を聞こうとする努力を怠ってしまうからである。その点のHRTの動きはよく考えられていたと思う。それと、思ったのは、子どもたちに英語を聞く耳を育てるためには、プレゼンテーションをわかりやすく、もっと言うならば画面だけみても、何を言おうとするかわかるようなもので、そこに英語が追加されることによって、英語の聞く力をつ

けるというのがいいのではないかと感じた。

全体を通して、研究授業ということで小学校英語のポイントをよく押さえてあり、活動案の流れも良かった。ALTからの文化を伝える場面を入れたというのも良かった。その上で、自分が公開授業をする立場にいたとしたら、児童のコミュニケーション場面をもっと増やす内容を考えたと思う。会場にいる先生を使うということには、賛否があるだろうが、私だったら、来ている先生方に、名前や学校名などの交換の挨拶の後、好きな教科や得意な教科の交換などをして、シールをもらうなどの方法を考えたかもしれない。ともあれ、小学校英語の授業を見た私の経験の中でも、よくよく考えられたプランによるすばらしい授業であったことは、間違いない。

(2) 研究協議について

・平成19年度、20年度と文部科学省の「小学校における英語活動等国際理解活動推進事業」拠点校として指定を受け、研究を進めてきた。

・平成21年度には、「外国語活動における教材の効果的な活用及び評価のあり方などに関する実践研究事業」の研究指定を受けている。

・低学年14時間、中学年14時間、高学年35時間の英語の授業があり、ALTの入ったTTの授業も多い。低学年中学年については、特別活動及び余時数で対応をしている。

・英語ノートに準拠した形で指導をしている。

・自己評価シートを活用している。

・局の泉先生からは、小学校英語に関する課題として、①教職員の意識改革・指導力向上、②小学生が主体的に学ぶ環境作りについてお話された。

感想

研究が全職員のものになっているということを随所から感じる事ができた。高学年の担任以外も、低・中の学年においても英語の授業があるわけであるが、公開研を内部でどんどん行い、力量を高めていることがよくわかった。

私は、拠点校として周辺校との連携について、質問した。町の教育研究組織に、小学校英語を研究する会があり、夏や冬に研修会を開いているという回答を得た。せたなの場合、町教研に英語サークルがあり、同様の研修が行われている。今後において、当町においても、有志が集まることから始めることになるのかもしれないが、定期的な研修会を開き、即授業で実践できるようなチャッツやゲームなど先生方の英語教育に関するひきだしをふ



やしていくことが大切であると感じた。

(3) ワークショップについて

先生方を交えて、キーワードゲーム、パズルゲーム、はえたたきゲームを行った。

キーワードゲームのやり方にはいろいろある。今回は、①4～5人のグループを作る。②1月から12月のカードとサイコロ（消しゴムなどでもいい）を中央に置く。③ALTはキーになるカードを決め、みんなに知らせる。④リーダーは、任意の月の名前を言い、グループのみんな



はそのカードを指さし、リピートする。⑤リーダーがキーになる月の名前を言った時、グループのみんなは、リピートせず、サイコロを取る。という内容である。このゲームで考えられているなあと思ったのは、ただリピートするだけではなく、何月なのか指を指すというところであり、使えると思った。

次はパズルゲーム。①乗り物（バス、ヘリコプター、地下鉄、電車）の絵がそれぞれ4枚に分割され、合計16枚が裏を向けてグループの前に置かれている。②それぞれのカードの裏にはマグネットがついており、黒板に貼れるようになっている。③参加者は一列に並ぶ、④前にいる人は、カードを一枚拾い、黒板に貼る。⑤二番目以降の人は、



手でタッチをして、次のカードを拾い、黒板に貼る。⑥これを繰り返して、絵を完成させていく。⑦絵が完成したら、絵を貼った人以外のグループの人は、「What's this in English?」と大きな声で言い、絵を貼った人は、「It's a bus.」などと大きな声で答える。⑧全部のカ

ードを貼り終えたチームが勝ち。

はえたたきゲーム ①乗り物などの数種類のカードを黒板に貼る。②3～4組のグループを作り、一列に並ぶ。③一番目の人は、はえたたきを持つ。④参加者全員で、「What's this in English?」と大きな声で言う。

④ALTは、「It's a helicopter.」などと貼ってあるカードの一つの乗り物の名前を言う。⑤一番目の人は、該当のカードをはえたたきでたたく。⑥一番先に



たたいたグループに1点。⑦はえたたきをした人はグループの方を向く。⑧今はえたたきをした人以外のみんなは、また、「What's this in English?」と大きな声で言う。⑨はえたたきをした人は、それぞれ大きな声で、「It's a helicopter.」と言う。一番声の大きかった人に一点をあげる。審判はALTかHRT。

同じフレーズを何度も繰り返すので、自然と口ずさむようになる。また、声の大きさも問われるので、しっかりと発音ができる練習となる。

(4) 公表 (局、泉指導主事)

「やってみることが大切、やってみないとわからない」

課題として

1. 年間指導計画について

①英語を扱う。②学年ごとに目標を立てる。③言語や文化に関することとコミュニケーションの内容の関連を図る。④他教科で学んだことを活用すること。⑤指導計画は、HRT, JTEが作成すること。⑥ネイティブスピーカーや地域の指導者との協力を図る (ALTかませではいけない) ⑦中学校における外国語との関連を図る。

2. 単元の指導計画について

①適切な目標を立てる。②言語や文化とコミュニケーションの関連を図る。③他教科で習ったことの関連を図る。④指導体制の充実。⑤視聴覚教材の効果的な活用。⑥体験的なコミュニケーション活動の充実。特に④から⑥が大切。

3. 小中の連携

①使用している教科書、教材、指導計画などの情報交換と一緒に何かをする交流の段階。

③連携 カリキュラムがつながっていること①目標に一貫性があること。②学習内容に系統性があること。③小学校で指導したことが中学校の導入に引き継がれていること。

感想

最初の一言が自分にとっては、強烈であった。「やってみることが大切。やってみないとわからない。」全てのことに対して言える言葉であるが、小学校英語においてもしかりである。来年から、好む好まざるにかかわらず小学校英語がスタートする。以前どの研修会か忘れたが、ある研究指定校での実践をお話になった大学の先生が、学校全体の取り組みということですが、ぶっちゃけたところ、本当に高学年の先生全員が積極的に英語の授業をしているんですか、という質問に対して、苦笑いをしながら、「逃げている先生もいます。」という話を聞いた。来年35週ということであるが、実際は月に何回かになってしまったり、外国語活動の目標とは全く違うような形でお茶を濁してしまうような授業になったり、そういう先生が現れないことを願いたい。たまたま自分は昔、英語をかじっていたということもあり、やっぱりある程度先頭を切って、いろんな勉強会に出かけ、自分でも実践して、時には、仲間に情報を提供したり、そんな役割を担う責務があると感じる。また、「英語！？どうしよう。」という先生も数多いのは現状である。書籍を読むのはたいへんであろうから、冬休みに行われる研修会に参加したり、ビデオ（ネットを探すとけっこうゴロゴロしている）を見たりして、ノウハウを勉強するというのも大切であろうと思う。

今回の研究会で、感じたのは、若い先生が多かったということ。会場に入ってまずそのことを感じ、自分も気持ちが若くなったつもりで、研究協議でも発言してしまったし、ゲームでも汗を流した。若い先生方の今後の活躍を期待したい。

さらに、一番嬉しかったのは、閉会式終了後、全職員が玄関前に一列に並び、参加者一人一人に来てくれたことのお礼を言ってくださった場面である。みんなとてもすがすがしく、やり遂げた表情をしていて、この研究は本物だなあと思った。心温まる研修会であった。